対象物が現実に存在しない名詞の特徴

保田　祥

現実に対象物が存在していないことばは、対応する「個物」が存在しないとすれば、どのようにそれらについての経験を得ることができるのであろうか。また、「概念」はどのように存在し得るのであろうか。

ことばの「意味」を考えるとき、現実に対応物（「個物」：柴田(1982)等）、少なくとも概念が存在しているとみる（柴田(1982)等）ことが多い。ことばの複雑な概念は、様々な異なる経験などから抽出された領域が組み合わされたもの（domains：Langacker(1987)、Cluster Models：Lakoff(1987)等）であると考えられている。

本研究では、一般に「架空」「幻想」上の生物とされる名詞[1]を調査した。中でも、日常生活でも使用される語として、「鬼」を主にとりあげ、補足的に「龍（竜）」を分析する。雑誌[2]、Web[3]などに見られる用例は、種類に偏りが見られるため、小説・随筆の用例を分析対象とした。また、特徴を明らかにするために、対象物が現実に存在している名詞であり、且つ「鬼」や「龍（竜）」と同様に生物であるということから、「犬」をとりあげ対照を行う。「対象」と「概念」と「意味」との関係について、新たな視点を得るきっかけとなることを期待するものである。

1. 対象物が現実に存在している名詞

1—1.「犬」について

①特定される「犬」或いは「犬」という種類の動物

対象物が現実に存在している「犬」を含む用例[4]では、用例全体の七割ほどが、特定される犬あるいは犬という種類の動物を表している。

(01)　本当にそれは一番の愉快そうな時でした。彼は私の家の庭つづきの広い南向きの斜面の原っぱで、私共の大きな飼犬と山羊を相手にころがりまわりました。彼のがっしりした、私には寧ろ恐ろしい程な動物的な感じのする体が、真白な山羊の体と一緒に犬に追われながら、まるで子供の体のようにころがりまわるのです。そうしては青い草の中にいっぱい陽をあびて、ゴロリと横になっては犬をからかっていました。（伊藤野枝「ある男の堕落」　以下用例中の下線は論者による）

(02)「うん、そうだろうな。この世の中に、何らの意味も見いだせないとする考え方もあるかもしれん。人間も犬も猫も、単なる動物に過ぎない。そして、死んでしまえばいっさいが無になる、という考え方もあるだろう。だが見るもの聞くものすべてに、自分の人格と深いかかわりを感じとって生きていく生き方も、あるわけだからね」(三浦綾子「塩狩峠」)

(01)では、「私共の大きな飼犬」と特定された「犬」を対象とし、(02)は、「人間」「猫」と並列で用いることにより、「人間」や「猫」と「動物」という点で共通性を持つ「犬」を表していると読むことができる。他の名詞と並列的に用いる場合(5)、「犬」は「犬」という種類の動物を表す用例が多いことがわかる。

②比喩に用いられる「犬」

比喩として「犬」が用いられる例は、全体の三割に満たないが、以下のようなものが見られる。なお、特に直喩の用例に表れているという特徴がある。

(03)僕は犬みたいな扱いを受ける、と学生がいった。僕は子供の時、犬を発情させて遊んだ事があるけど、今発情させられるのは僕だ。(大江健三郎「他人の足」)

(04)万寿丸は、その哀れな犬の遠ぼえを、絶えず吹き鳴らしながら、かくして進んで行った。(葉山嘉樹「海に生くる人々」)

(03)では、「みたいな」という直喩の指標により「学生」は「僕」を「犬」に喩えていると見る。また、隠喩の例としては、(04)例、「万寿丸」の汽笛を「犬」の「遠吠え」に喩えていることから、船である「万寿丸」が「犬」に喩えられているようなものがある。

以上から、現実に対象物が存在している名詞については、現実に存在している対象物そのものを指す用例がその殆どであり、比喩に用いられる例は少ないということがわかる。

また、比喩用例については、その多くが直喩であるという特徴も見られる。

2. 対象物が現実に存在しない名詞

2—1.「鬼」について

「鬼」を含む用例(6)では、特定される鬼、あるいは鬼という種類の生物を表している用例が、用例全体の二割程度に留まる。半数ほどの用例が、主に人を表す比喩として用いられているので

ある。

その他、接頭[7]や、辞書[8]に見出しのあるようなことわざや慣用句などとして、「鬼」が現れる用例も、「鬼」を含む用例のうち一割程度見られている[9]。

「鬼」を含む辞書見出しにもなった表現は種類も多く、用例を見ても出現頻度が高くなることがわかる。このほか、辞書に見出しとしては上げられていないが、「鬼の腕」[10]など、慣用化されたと解される表現も見られている。その他、「鬼」を含む用例全体の一割弱が、「鬼ごっこ」に関わる[11]。

①特定される「鬼」・「鬼」という種類の生物

「鬼」は物語世界に存在が仮定される「鬼」であるか、「鬼」という種類の生物について言及する場合にほぼ限定されるという特殊性が見られる。「鬼」を模ったとする物を表すものも数例ある[12]。

(05)　御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取り捲いて、階の前へ引き据ゑました。(芥川龍之介「杜子春」)

(06)　余は今この四角な家の石階の上に立って鬼の面のノッカーをコツコツと敲く。(夏目漱石「カーライル博物館」)

(05)では、地獄の「鬼」が物語世界において、実際に存在するとされている。(06)は存在の仮定される「鬼」であり、それを模った「ノッカー」なのである。

②比喩に用いられる「鬼」

比喩として「鬼」が用いられる例は、全体の半数近くに上る。直喩例、隠喩例ともに、用例中、ほぼ同数程度現れている。

(07)「僕もその一人だが、鬼のような体格を持っていて、女のような弱虫が隊にいて見るとたくさんいますよ。僕はこんな心でこんな体格を持っているのが先天的の二重生活をしいられるようで苦しいんです。これからも僕はこの矛盾のためにきっと苦しむに違いない」(有島武郎「或る女」)

「鬼のような」という直喩指標があり、「僕」を含む「隊」にたくさんいる人々を対象としていると解する。また、直喩の指標を見るに、「鬼のように」「鬼のような」の形がほとんどではあるが、他に、「鬼の如き[13]」「鬼みたような[14]」「鬼という」など、さまざまな種類が現れることが

わかっている。

(08) 下手に食い違った結果が起るもんだ。と考えながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺めている。せっかくの考えもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩れてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しいだろうに、どれもこれも申し合せたように獰猛の極致を尽している。(夏目漱石「坑夫」)

この用例では、「鬼」が「鬼」そのものを表しているのではない。隠喩として「坑夫」のことを表していると読むことができよう。

2—2.「龍(竜)」について

「龍(竜)」を含む用例[15]についても、主に「鬼」と同様の結果が見られている。

①特定される「龍(竜)」あるいは「龍(竜)」という種類の生物

以下の(09)例のように、物語世界に存在が仮定される「龍(竜)」であるか、あるいは(10)例に見られる「龍(竜)」という種類の生物について言及する場合にほぼ限定される。ただし、「鬼」と異なり、「龍(竜)」を模った物を表す(11)の種の用例がそのうちの四割を占める[16]。これは、「龍(竜)」の形状が「鬼」に比べ、図案化される等で普遍化しているためと考えられる。

(09) 龍のチャーナタは洞のなかへさして來る上げ潮からからだをうねり出した。(宮沢賢治「龍と詩人」)

(10) それは誰でも、人から非難せられたり、怒られたりしていい気持がするものでは無いかも知れませんが、自分は怒っている人間の顔に、獅子よりも鰐よりも竜よりも、もっとおそろしい動物の本性を見るのです。(太宰治「人間失格」)

(11) 父は身首の所を異にすることなく死んだ。希望がかなえられたわけだ。そのことだけをとると、当時としては例外的な恩寵であったかもしれない。体がたおれたとき、彼は希望にみちてたちあがり、花や竜の彫刻にみちた、厖大な群集のひしめく薄明の門へいそいだことだろうと思う。(開高健「流亡記」)

②比喩に用いられる「龍(竜)」

比喩として「龍(竜)」が用いられる例が、「鬼」同様に全体の四割以上を占める。(12)例のよう

な直喩例、(13)例のような隠喩例ともにほぼ同数程度現れることも同様である。

また、「川」「山」などの自然、「木」「煙」「雲」などの形状をいう比喩表現が目立つ。

(12)　黒い煙は、いったん銀白色の膜につつまれたが、まもなくそれを破って、あらしの黒雲のように——いや、まっくろな竜のように天じょうをなめながら、のたくりまわった。(海野十三「金属人間」)

(13)　左手の黒龍の腹の下に一点曇りなき月が浮かんでいる。やや小ぶりな右手の龍が、顎をひらき、その月を欲して咬み合う勢を示した。左手の龍は憤り、ドーッ・ドーッ風の吹く毎に体を太く太く膨らかして来る。(宮本百合子「夏遠き山」)

以上、「鬼」と「龍(竜)」の用例を検証すると、現実に対象物が存在していない名詞については、物語世界等の架空世界にその存在を設定された場合、あるいはその種類の存在について言及される場合のみ、それらの名詞が対象物を指し示すのだといえる。したがって、用例の半数が比喩として現れることになる。

3. 検　証

これまでの用例分析をまとめると下図1～3のようになる。

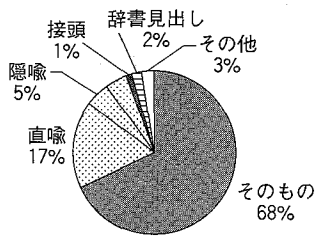


図1　「犬」の用例種別

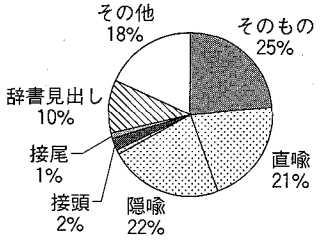


図2　「鬼」の用例種別

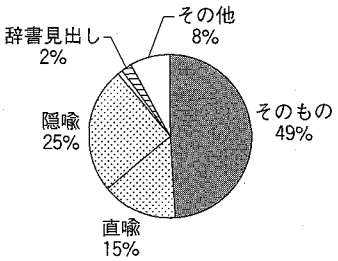


図3　「龍（竜）」の用例種別

対象物が存在するとされる種類の名詞「犬」と、対象物が現実に存在しないと考えられる種類の名詞「鬼」「龍(竜)」では、用例の種類別の出現頻度が異なっていることがわかる。

そのものとして対象物を指す用例は、「犬」で68%、「龍(竜)」で49%、「鬼」では25% である。「犬」は対象物が現実に存在しているため、「犬」そのものとしての用例が多くなることが挙げられる。「鬼」や「龍(竜)」は対象物が現実に存在していないために、そのものを表す用例は限定されるのである。

また、比喩として用いられている用例は、「犬」が26%、「龍(竜)」は42%、「鬼」は45% である。この比喩用例の割合に見える差異が、現実における対象物の有無に関わる最も大きな特徴であろうと考えられる。そのため、本稿では、特に比喩用例に注目してみたい。

特に、「犬」が比喩表現で用いられる場合、直喩の用例が多いのであるが、「鬼」や「龍(竜)」の用例では直喩・隠喩ともに偏りはないことが見られている。

佐藤(1978)は直喩を「類似性にもとづいて直喩が成立するのではなく、逆に《直喩によって類似性が成立する》のだと言いかえてみたい。「美しい蛭のやうな唇」という直喩によってヒルとくちびるとは互いに似ているのだという見かたが、著者から読者へ要求されるのである。(佐藤1978 P.82)」と説明する。また、「直喩が相手に対して説明的に新しい認識の共有化を求めるのとは逆に、隠喩は相手に対してあらかじめ共通化した直観を期待する。(同 P.118)」とも言う。

すなわち、「鬼」や「龍(竜)」は対象物が現実に存在していないからこそ、普遍的な対象を仮定することが必要とされ(17)、「あらかじめ共通化した直観」を期待する用例が増えるものと考えられるのである。

さらに、「鬼」や「龍(竜)」などの対象物が現実に存在しない名詞は、対象物が存在していないからこそ、逆に存在しない対象物をあたかも存在するかのように(18)認識するべく、比喩表現が用いられていると考えることができる。

(14)の用例を確認したい。

(14) 香潮の顔を一目見ると、あまりの変りように愛想をつかしまして、いよいよこんな鬼のような顔をした者の妻となる事は出来ないと思いました。(杉山萠圓「白髪小僧」)

小説全体の中で、「香潮」は以下のように描写される。

「その苦しみのために香潮の身体は見る見る肉が落ちて、顔は年寄りのように痩せこけてしまいました。」「今度は醜い、怖ろしい、骸骨のような化物の姿が現われました。」「これが彼の半腐れの香潮で、集まっている者は皆その顔付の恐ろしさに、大人も小供も肝を潰して、散り散りに逃げ失せてしまいました。」

このように、「鬼」の場合であれば、「鬼」を用いて「人」などの特徴を表そうとするのではな

く、「人」などの特徴をもって、「鬼」を認識しようとすると考えられる。
同様に、「龍(竜)」でも、(15)のような用例が見られる。「龍(竜)」を用いて「木」などの特徴を表そうとするのではなく、「木」などの特徴をもって、「龍(竜)」を認識しようとするのだと読むことができよう。

(15)　さらに私達のなつかしむのは、あの古典的な樹皮です。渋い渋い感じの、そして質朴な、あの樹皮です。あの龍のような不格好な老樹が、もし滑々した肌をもっていたら、それはとても見られたものではないでしょう。(佐左木俊郎「季節の植物帳」)

現実に対象物が存在しないとされることばを比喩表現に使用する場合、一般に喩詞と見えることばが被喩詞と見えることばの有している特徴を、その類似性として取り込んで行くのである。これは、現実に対象物が存在しないが故の特徴といえる。

4. まとめ

現実に対象物が存在しない名詞の特徴として、その多くの用例が比喩として現れる。対象物「そのもの」としての用例は、物語世界に存在が仮定されるか、あるいは存在を仮定して想像した形を模った物、仮定した存在について言及する場合などにほぼ限定される。

これは、対象物が現実に存在する名詞が、その七割において「そのもの」として用例に現れることと、対照的な差異が見られる点である。現実に対象物をもたない名詞が、比喩表現に用いられるということは、その名詞に普遍的な対象物を仮定し、あるいは被喩詞の特徴でもって存在しないものを特徴づけるという、この種の名詞に特徴的な性質であると考えられる。

参考文献

草野巧 (1997)『幻想動物事典』新紀元社
佐藤信夫 (1978)『レトリック感覚』講談社学術文庫 (1992)
佐藤信夫 (1981)『レトリック認識』講談社学術文庫 (1992)
柴田武 (1982)「現代語の語彙体系」『講座日本語の語彙7　現代の語彙』明治書院
中村明 (1977)『比喩表現の理論と分類』秀英出版
松本曜編 (2003)『認知意味論』大修館書店
籾山洋介 (2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨他編『認知言語学論考』1 ひつじ書房
米山三明・加賀信広 (2001)『語の意味と意味役割』研究社
Jackendoff, R. (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge: The MIT Press.
Lakoff, G. (1987) *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press.
Langacker, R. (1987) *Foundations of cognitive grammar. vol.1*: Theoretical prerequisites. Stanford, Calif.: Stanford University Press.

注

（1）『幻想動物事典』(1997) に掲載されている見出し語につき、小説・随筆など1,000作品中の出現頻度を調査した。うち、用例数は「鬼」135例、「龍（竜）」21例であった。その他「人魚」「河童」などは数例にとどまる。

（2）雑誌より収集した例は「上司・指導者」「○○の鬼」「渡る世間」「鬼母（嫁・姑）」にほぼ集約される。

（3）Webより収集した例は、副詞用例をはじめ、程度を表す用例が大部分である。

（4）「犬」を含む用例は、近代以降の小説・随筆、約3,000作品中、440例を採取した。

（5）（例）老人は髯から手を放す。やがて眼を眠る。人も犬も草も木も判然と映らぬ古き世界には、いつとなく黒い幕が下りる。（夏目漱石「虞美人草」）

この用例では、「人」「草」「木」と並べられ、「判然と」区別のつかぬ例示として「犬」が用いられている。この場合、特に「人」との関係で「動物」である「犬」を表しているものと解する。

（6）「鬼」を含む用例は、近代以降の小説・随筆、約3,000作品中、544例を採取した。

（7）ほとんどが「人」に冠するものである。

（例）こうして二十八の年から四十九歳の今日まで警視庁に奉職して、あらゆる難問題を解決して、鬼狭山とまで謳われた私の眼力は、この少年の五尺二寸ばかりの身体を眼の前に置きながら、遂に何等の捕えどころも発見し得なかった。（夢野久作「暗黒公使」）

（8）調査した辞書は、『集英社国語辞典』第二版（2000）、『三省堂国語辞典』第五版（2001）、『角川国語辞典』新版（1969）、『岩波国語辞典』第六版（2000）、『講談社国語辞典』第四版（1982）、『新装改訂新潮国語辞典』新版（1982）、『広辞苑』第五版（1998）、『大辞林』第二版（1995）、『日本国語大辞典』第二版（2000）である。

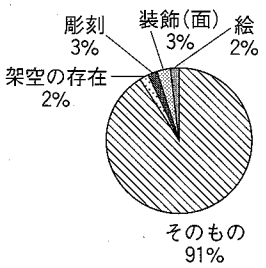
（9）（例）鬼と金棒が結びつこうとしている。対立する者にとっては、放任できないことだ。政治資金どころのさわぎではない。資金のある点では後藤がいくら努力しようが、加藤派にかなうわけがない。現実もまた、後藤に対していくらか優位にある。しかし、こんなものが出現したら、逆転しかねない。（星新一「人民は弱し官吏は強し」）

また、「鬼に金棒」のほか、「鬼のいぬ間の洗濯」「鬼が棲むか蛇が棲むか」「鬼が出るか蛇が出るか」「鬼が笑う」「鬼とも組む」「鬼の霍乱」「鬼の首をとる」「鬼の念仏」「鬼の目に涙」「鬼も十八」「鬼を欺く」「鬼を酢にして食う」「鬼神のお松」「暗闇に鬼」「心を鬼にする」「渡る世間に鬼はない」が見られた。

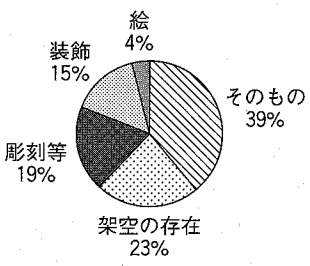
（10）「鬼の腕」は「茨木童子」の伝承・物語によるものと考えられる。その他にも、「大江山」「鈴鹿山」など、鬼が棲むとの伝承・物語を下敷きとした用例が見られる。また、「いわゆる」などとともに現れる「高箒を鬼と見る」など、辞書見出しには至らずとも、慣用化していると考えられる用例がある。

（11）（例）「今度は隠れんぼですな。目をつぶって数をかぞえていますよ。僕は鬼ですから。……もういいかい、ときくところですね」（三島由紀夫「親切な機械」）

（12）存在が仮定される「鬼」・「龍（竜）」を表すとみえる用例の内訳は以下の通りである。



図A 「存在が仮定される「鬼の用例種別」



図B 存在が仮定される「龍（竜）の用例種別」

(13)　(例)　瀧口、あッとばかりに呆れて、さそくの考も出でず、鬼の如き兩眼より涙をはら〳〵と流し、恨めしげに伏見の方を打ち見やれば、明けゆく空に雲行のみ早し。(高山樗牛「瀧口入道」)

(14)　(例)　私たちは父が米代をもって来てくれたのだと思って急に明るい心になった。ところが実際はそうではなかった。何と残酷な、鬼みたような男で父はあったろう。(金子ふみ子「父」)

(15)　「龍(竜)」を含む用例は、近代以降の小説・随筆、約3,000作品中、99例を採取した。

(16)　注12を参照

(17)　共起する動詞をみるに、「鬼」では、「なる」「来る・出る」「憑く」をはじめ、限定的である。「龍(竜)」でも、「なる」「のぼる」「住む」など限定的である。

それらに対し、「犬」は「吠える」が共起動詞の15%程度と特徴的ではあるが、「犬」一般に関係する具体的な行動を表す動詞(「かむ」「なめる」「嗅ぐ」など)が各種現れるという差異が見られる。

結びつく助詞や共起する動詞の種類による分析から、当該名詞の使われ方によって意味が規制されるものと考えるが、ここでは詳述しない。

(18)　ここでは詳述しないが、比喩表現において、対象物が現実に存在しない名詞では、その行動や性質よりも、「顔・形相」「手」「色」「形」などその形状に焦点がある場合が多いことがわかっている。